



とうかつ

千葉県教育庁東葛飾教育事務所
〒271-8563
千葉県松戸市小根本7
☎ 047-361-4103
Fax 047-368-5316

東葛飾教育事務所だより 第15号 2014. 3.

桜のつぼみが膨らみ、春の訪れを感じるようになりました。各学校では新年度の向けての準備が着々と行われているところだと思えます。

さて、今年度も管内各市の協力のもと、指導室訪問を終えることができました。指導室訪問は、県の施策の周知とともに学力向上・生徒指導充実をめざし、各市の実情に合わせて行うもので、今年度27会場で実施しました。学校を会場に、授業展開や全体会・分科会等を行い、各教科・領域の授業改善について話し合ったり、情報交換を行ったりしました。また、各主任対象の研修会などで、県の施策説明や先進的な取組、情報交換などを行いました。いずれの会場でも、参加された先生方の日頃の教育実践の工夫や苦勞、様々な情報交換など、大変充実した訪問となりました。また、指導室訪問の内容が、各学校での実践に繋げていただけたことと確信しております。

管内各市教育委員会・各学校などの御理解・御協力、ありがとうございました。

指導室では、次年度に向け、「全ては子どもたちのために」を合言葉に、指導室訪問の充実に努めてまいります。どうぞよろしく申し上げます。



平成25年度 第4回東葛研究生ゼミ

～東葛研究生ゼミ及び長期研修生の研究・研修発表会～

2月24日（月）に、合同庁舎6階で『東葛研究生ゼミ及び長期研修生の研究・研修発表会』が行われました。東葛研究生の研究は、今までの教育実践を見直す機会であるとともに、新たな課題に気付く機会でもあります。また、長期研修生の研究は、今までの教育実践を論理的な視点で見直しを図り、改善・実践する機会であります。ともに、この東葛飾地区にとっては大きな財産と期待されています。その期待に応えるべく、研究を積まれた16名の先生方、本当にありがとうございました。発表された内容は、下記のとおりです。

【 東葛研究生ゼミ 研究テーマ 】

| No. | 氏名 | 学校名 | 教科等 | 研究テーマ |
|-----|------|---------------|--------------|--|
| 1 | 武藤太樹 | 松戸市立 中部小学校 | 特別支援 (算数) | 特別支援学級における算数科指導の工夫 ～算数の学習を通して、表現力を育む～ |

| | | | | |
|----|-------|-----------------|----|---|
| 2 | 佐藤隆徳 | 松戸市立 北部小学校 | 国語 | パネルディスカッションを通じて話す・聞く力を高める国語科指導 ～単元を貫く言語活動の充実を目指して～ |
| 3 | 岡田祐典 | 松戸市立 矢切小学校 | 国語 | 国語科における単元を貫く言語活動の充実を図る授業の探求 ～説明的文章の学習を通して言語力を高める～ |
| 4 | 古家倫子 | 松戸市立 根木内小学校 | 国語 | 自分の思いを伝え合う子を育てる国語科指導の在り方 ～理由を聞いたり、話したりする活動を通して～ |
| 5 | 齋藤 潤 | 松戸市立 柿ノ木台小学校 | 社会 | 思考力を高める学習指導の工夫 ～社会科の話し合い活動を通して～ |
| 6 | 黒岩美貴子 | 松戸市立 寒風台小学校 | 算数 | 一人ひとりが、生き生きと意欲的に学ぶ子どもをめざして ～算数科を通し、聞く・話す力を育み、「聞き合い、伝え合い、学び合う」～ |
| 7 | 伊藤 俊 | 松戸市立 旭町小学校 | 社会 | 意欲的に学習に取り組み、社会科を「好き」「楽しい」と思える児童の育成 ～資料提示の工夫を通して～ |
| 8 | 佐々木優 | 我孫子市立 根戸小学校 | 体育 | お互いを認め合える体育学習のあり方 ～Q-U 検査結果を活かしたグループ学習を通して～ |
| 9 | 澤井千恵 | 鎌ケ谷市立 鎌ケ谷小学校 | 国語 | 児童の読書活動につながる授業の工夫 ～言語活動を生かした単元構成のあり方～ |
| 10 | 平林邦章 | 鎌ケ谷市立 西部小学校 | 算数 | 学習意欲を高めるためのICTの活用 ～1年生の算数授業を通して～ |
| 11 | 梶浦晴美 | 鎌ケ谷市立 道野辺小学校 | 道徳 | よりよいかかわりに気付き、道徳的実践力を育む道徳の時間の工夫 ～モラル・スキル・トレーニングの手法を通して～ |

【 長期研修生 研究テーマ 】

| No. | 氏 名 | 学 校 名 | 教科等 | 研 究 テ ー マ |
|-----|------|----------------|------|---|
| 1 | 中村和恵 | 野田市立 七光台小学校 | 教育臨床 | 教員の学びを支える校内研修の在り方 ～教育相談に関するA小学校の研修事例を通して～ |
| 2 | 金子淳一 | 柏市立 光ヶ丘小学校 | 体育 | 肯定的な人間関係を育む、ネット型ボール運動の学習指導 ～スポーツ教育モデルを取り入れた授業実践を通して～ |
| 3 | 奥村明子 | 流山市立 八木南小学校 | 社会 | 人物の働きを考える力を育む小学校歴史学習の在り方 ～「覚える歴史」から「考える歴史へ」～ |
| 4 | 郡司美紀 | 流山市立 南流山中学校 | 外国語 | 英語の語順体得を目指した指導の研究 ～フォーカス・オン・フォームを取り入れた授業プログラムの実践を通して～ |
| 5 | 鈴木美枝 | 我孫子市立 新木小学校 | 国語 | 児童自身の語彙体系を意識した効果的な授業づくりの研究 ～基礎力と活用力の関係から意味マップ法を活用した語彙の分析と考察～ |

東葛研究生の皆さんは、学校にいながら、5月から8カ月ほどをかけて、研究に取り組まれてきました。目の前にいる子どもたちの学力向上・生徒指導充実を目指し、具体的な姿や手立てをもとに、研究を進めてこられたということです。日常の多忙な教育活動の合間をぬっての研究ということで、仮説や手立てを立てること、検証授業の準備等、時間を作り出すのは、相当大変なことだったと思います。こうして、報告・発表まで来られたことに心から敬意を表します。

教師の学ぶ姿は、児童生徒の学習意欲に大きな影響を与えます。本年度、東葛研究生ゼミに参加された先生方が、学級・学校で児童生徒に与えた影響は大きなものであったと確信しています。同時に、本年度学ばれたことを、次年度からの教育実践だけでなく、更なる研究に繋げていただきたいと思います。

長期研修生の皆さんは、学校を離れ、1年間、研究生活を送られました。大学や教育機関等で、専門の教授等の指導を受けながら、自分の研究テーマを掘り下げ、時間をかけて研究を進めてこられたということです。この長期研修生制度は千葉県ならではのもので、大変貴重な1年間を送られたことと思います。専門的な理論研究を重ねながら、同時に検証授業の準備・実践等を平行して行う等、相当、苦勞されたことと思います。加えて、自らがアクションを起こさなければ研究が進まないという今までの教職生活とは全く違う『壁』に、年度当初は戸惑われ、悩まれたこともあったのではないのでしょうか。また、千葉県全県から集まる長研生との情報交換から、東葛飾地区の現状と『課題』にも気付かれたのではないのでしょうか。そういった『壁』や『課題』を見事に乗り越え、内容の濃い報告をしていただきました。この1年間に学んだことを、次年度からは広く広めていただき、東葛飾管内ひいては千葉県の児童生徒のために還元していただきたいと思います。

実は千葉県の長期研修生は今年度県全体で46名、その内、東葛飾地区は本日発表していただいた5名のみ、他地域に比べ、大変少なくなっており、この傾向は数年続いています。しかし、今、教員に求められているのは「授業力」「指導力」の向上で、積極的な研究と修養であります。東葛飾教育事務所としては、多くの先生方に是非、千葉県ならではの長期研修生制度を活用していただきたいと思います。

東葛研究生並びに長期研修生の皆さんが、研究を進められたのは、在籍校の校長先生を始め、関係の先生方の支援があつてのことです。感謝の気持ちを忘れずに、次のステージに向かってほしいと思います。

また、本発表会に向けて、御理解・御協力いただいた、各市教委・そして関係の先生方に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。



流山市立流山北小学校が後期大賞受賞 「遊・友スポーツランキングちば」



千葉県教育委員会では、児童生徒の体力向上と社会性の育成を目的として「遊・友スポーツランキングちば」を実施しています。本年度後期（12月から2月）に参加した県内216校の中で、もっとも報告数の多かった「流山市立流山北小学校」に大賞が授与されました。3月14日の授賞式では、教育振興部長より児童の代表に賞状が渡されました。その後、陸上競技の国体選手による「砲丸投げ」と「ハードル走」のデモンストレーションが行われました。最後に「長縄みんなでジャンプ」「バスケットボールフリースロー」の種目で、児童の代表チームと教員・国体選手チームとが対戦しました。

流山北小学校は、年間でも第5位となり年間賞（年間記録が10位まで）を受賞しまし

た。この他に管内では、第10位の柏市立高柳小学校にも年間賞、第12位の流山市立鱈ヶ崎小学校、第19位の鎌ヶ谷市立五本松小学校には奨励賞（200回以上の報告のあった学校）が授与されます。各学校でも積極的に取り組んでいただきたいと思います。クラスやグループの記録が更新されたら、県体育課学校体育班へFAX（043-221-6682）してください。



「長縄8の字連続跳び」を行う児童の様子



「長縄みんなでジャンプ」を行う教員・国体選手チーム

柏市立土小学校 優秀賞を受賞!

朝日小学生新聞主催『学校・地元自慢コンテスト』で柏市立土小学校が、全国大会決勝進出10校に千葉県代表として、ただ1校選ばれました。児童会が中心となって、「笑顔」をテーマに作成したプレゼンテーションが評価されたものです。1チームが4



特別審査員つるの剛士さんと記念写真を撮る土小学校6年生チーム

名までの参加だったため、児童会役員を5年生チームと6年生チームに分け、2チームで参加しました。結果、6年生チームが、全国1710作品の中から、優秀賞を受賞しました。休み時間を使っただけの作成だったため、2ヶ月ほどの時間をかけました。また、全校朝会などで発表の練習をするなどして、素晴らしい発表に仕上げました。



特別支援教育推進・連携会議が目指すもの

この会議は、教育事務所管内6市の教育委員会や特別支援学校、県立盲学校や聾学校、健康福祉センター、高等技術専門校、特別支援教育関係機関等による情報交換や研修を行い、管内特別支援教育の体制整備を図るためのものです。

今、学校教育においては、障害のある人もない人も共に学び共に生きる「共生社会」の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築が必要とされています。

そのためには、個別の教育的ニーズのある子どもたちに対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる多様で柔軟な仕組みを整備することが重要です。このため、小中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意しておくことが必要です。

そして、選択した学びの場での支援が、早期から就職・就労期まで一貫してつながれていることも大変重要になってきます。

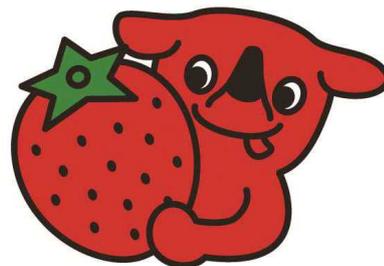
こうした、支援の連続性・一貫性を確保する上で、今、最も大きな課題は支援の主体が変わる「移行期」における支援の内容や方法といった中身の継続性の確保です。当教育事務所では、小学校から中学校、中学校から高等学校への支援の継続性の確保を課題として掲げ、高等学校や中学校の先生方にも参加を呼びかけ、現場レベルでの具体的な連携方策について検討を重ねています。

ライフステージに応じて教育・保健・福祉・労働等の各支援機関が連携するためにできることを見つけ、障害のある子どもたちとその家族を支援するための効果的なネットワークを構築するために、今後もこの会議を進化させていきたいと考えています。

ネットワークの構築とともに、支援の質を高めるための研修にも力を入れています。聴覚障害・視覚障害・肢体不自由の障害特性の理解と対応に関する専門研修、言語の発達に関する研修、効果的な学校支援方略に関する研修、高等学校における特別支援教育の展開に関する研修等に取り組んできました。今後も理論研修というよりも、関係機関それぞれの現場ですぐに生かすことのできる実践研修を中心に取り組んでいきたいと考えています。



「特別支援学校のセンター機能」についての
実践報告される野田特別支援学校 磯山教諭





特別支援アドバイザーの学校訪問



■環境を整えるという視点

特別支援アドバイザーが助言するとき大切にしている視点として、「環境を整えること」があります。「感情を抑えられず手や足がでてしまう」「落ち着きがなく、人の話を聞いていない」「指示が通りにくい」などの課題がある児童生徒は、教室など周囲の環境によって、その特性（様子）の現れ方が大きく異なります。具体的に「環境を整える」といった場合、本棚やロッカーの上の荷物・身の回りの整頓はもちろんのこと、挨拶すること、学校のルールを守ること、お礼や感謝を伝えること等々の集団の中のルールをみんなで守ることも「環境を整える」ことと言えます。整理や、ルールを守ることで、「この教室は綺麗に使うものだ」「人と関わる時はいつでも丁寧に接する必要がある」ということが学びやすくなります。

また、課題がある児童生徒の周りには、課題が少ない児童生徒も、周囲が落ち着かなくなってくると、話を聞き洩らす、よくケガをする、自分自身も落ち着かなくなるなどの問題が起きやすくなります。そういった意味からも個人にアプローチする前に、環境を整えることがとても大事になってきます。私もそうですが、皆さんも、乱雑な部屋に入ると整った部屋に入るとでは、整った部屋に入る方がどこか安心感や落ち着きを感じると思います。児童生徒も同じ気持ちなのではないでしょうか。私たち特別支援アドバイザーは子どもたちの気持ちを大切にしつつ、個別の視点だけではなく、教室の環境など全体の視点に立って、助言援助に取り組んでいくことを心がけています。

■学習規律という視点

私たち特別支援アドバイザーが学校を訪問する際、学習場面や学級の様子として、「落ち着きがない」「指示が通りにくい」などの相談を受けることがあります。これは、話を聞く姿勢ができていないなど、学級としてのルールが定着していないことに起因する場合があります。

そのような時に私たちは、「ルールの見える化」を提案しています。学級で重点を置きたいルール、例えば「話の聞き方」について3つのルールを決めた場合、それを具体的に書き記し、教室の目立つ場所に貼っておくこと。これが「ルールの見える化」です。

ルールは日常的に確認されていると思っていても、口頭での伝達だけでは実は曖昧になりがちです。視覚的に確認し、繰り返し振り返ることで、ルールの定着が図られていきます。ルールが守られることで集団はまとまり、そうやってはじめて一人ひとりの児童生徒に支援が届く学級になります。

学級づくりにおいて欠かせないルールの定着。これは特別支援教育においても基本になります。「ルールの見える化」を学級づくりにご活用いただけたら幸いです。

■学習形態の工夫という視点

特別支援アドバイザーとして、学校訪問で授業を参観すると、教室の中には「落ち着きがない」「指示が通りにくい」といった課題を抱えている子どもたちがいます。

ある国語の時間で、教科書を読む、漢字練習をする、黒板を写すなど複数の活動内容とともに、一人で考えたり、グループで話し合ったり、あるいは全員で話を聞くなど学習形態もいろいろ変化させて学ぶ授業がありました。

落ち着きがない子どもたちは、同じ動作でなく、変化をつけることで飽きてしまうことなく、次の行動に集中して取り組むことができます。指示が通りにくい子どもたちは、考える、書く、読む、調べるといった、そのときそのときに取り組む活動内容が明白だと、学習の流れにのることが出来ます。

このように授業の中が一つ一つ区切られていると、子どもたちは気持ちの切り替えができ、授業に集中して向かうことができます。活動の単位が多彩であることで、誰もが「これならできる」場面があり、「次もがんばろう」という前向きな気持ちも生まれてきます。一時間の授業の中で一つでも「できた」を経験することは、積み重なると子どもたちの自信につながります。

特別支援アドバイザーから見た良い授業とは、課題を抱えている子どもたちにももちろん、すべての子どもたちが、活動が明確でわかりやすいと感じる授業だと思います。

■肯定的な言葉をつかうという視点

学校で子どもたちがしてほしくない行動をしているときに、教師が「〇〇しないで」と声をかけ続けてもその行動を繰り返してしまう場合があります。そんなときには、「◎◎したほうがいいよ」という声かけをすると良いと思います。それは、しないことを伝えるよりも、すると良いことを伝えた方が、意味や意図がわかりやすいからです。同時に、することを伝えておくことは、そのことをしてくれた時にその行動をほめやすくなります。

人は日常生活において耳にした言葉をよく使用する傾向があります。ほめる言葉や肯定的な言葉が多く行き交う空間は良い雰囲気を作ります。教室で教師が発する「～してね」「ここいいよ」「すごいね」などの肯定的な言葉やほめる言葉、励ます言葉は、子どもたちにとってわかりやすく、できたことでほめてもらいやすいものであり、それらの声かけが子どもたちの自己肯定感の醸成へと繋がっていきます。「自分はこうすればがんばれるんだ」と感じる日々と「自分はだめな人なんだ」と感じる日々が続くことの違いは大きなものです。

教室で発せられる言葉は、子どもたちの気持ちや学級の雰囲気、そして友人関係にまで影響を及ぼすことを理解し、互いに気をつけていけると良いと思います。

